

鏡を通して見た日本

Goldsbury, Peter Anthony

1. イントロダクション

それではこれから、私、ピーター・ゴールズベリの経験談を暴露しながらこの講義を始めたいと思います。私が1980年に広島大学に初めてやってきたときには、28年後にここでこうして皆さんの前で最終講義を行うことになろうとは夢にも思っていないでして。総合科学部の中では最終講義が頻繁に行われることもありませんでしたし、また早速の暴露となりますが、私自身、最終講義というものに出席したことが、実はありません。そのため、どのような形式で最終講義を行うべきであるのか検討がつきません。ですが、最終講義であっても、大学の他のあらゆる講義と同様、少なくとも教育的であり、かつ面白いものでなければなりません。そして受講者はいすに座って一語一語を理解しようと耳を傾ける、そこまでは通常の講義と同じであろうと思います。ですが、最終講義は最終の講義ですから、講師である私は広島大学における自分の学術的、教育的活動の実績とその軌跡をまとめる内容になっていなくてはならないかもしれません。

しかしながら、私の場合はこのような形式の最終講義を行うことは難しいという状況があります。私の専門は比較文化なのですが、マネジメント専攻が設立された2000年以降の数年間しか私はこの比較文化を教えていません。私は広島大学の中で自分の本当の学術的な専門分野、因みに古代ギリシャ哲学・論理学なのですが、これを教えたことが無いという点において、かなり珍しい存在であると思っています。私が広島大学で正規雇用の教員となったときには、言語思想論（英語で何と言えいいのか未だに分かりません）が私の専門になりましたし、その後、社会科学研究科国際社会論専攻に身分が移ったときには、言語構造論（同上）が私の専門となりました。以上のような私の経歴を踏まえまして、今日はギリシャ哲学についてお話しするよりも、現実的な比較文化について地に足のついた内容のお話をしようと考えて

います。私が広島大学の教壇に立ち、広島で暮らしてきた中で生の比較文化についてですから、ある意味では現実的にしかなり得ないとも言えます。

今日の講義の中ではこれまでの私の人生を振り返ってのお話しをする部分もありますが、その意図は単に自分のことについて話したいというわけではありません。文化を学習する際の大きな困難点の1つとして客観性をどのように保つかということが挙げられます。それゆえ、収集された「データ」、ここでは私が日本で経験したさまざまな場面ということになるでしょうが、このデータは意味のあるものであり、そしてその分析は十分に深いものでなくてははいけません。また、私自身が異文化を持った「外部者」であるため、データの収集やその分析に歪みが生じてしまう危険性もあります。

ルース・ベネディクトやマーガレット・ミード、コリン・ターンブルのような学者たちは、特定の民族によって構成される集団を研究する場合、その集団の中に混じってともに暮らすことでほぼ完全な客観性を保証することができると考えていました。ただし、実際には彼ら自身が元来その集団の一員ではないという事実こそがこの客観性の根底をなすこととなります。しかしながら、彼らはその研究対象の集団の言語の母語話者ではありませんので、データの収集に際しては現地の通訳が必要となります。そして前提として、そのようにして得られたデータはすべて真実であり、研究者自身によって歪められることは無いと考えるのです。さらには、続く分析もまた客観的であることが求められます。その分析が依拠する種々の概念が、当の分析対象の集団にはまったく認識されていないという事実にもかかわらず、です。もしも仮に私自身が彼らと同じような考えを持っているなら、こうして実際に日本に住むこと自体によって日本文化を学ぼうとすることになります。しかしながら、私が日本文化を分析するため

に用いるさまざまな概念が私の分析の客観性に影響を与え、結果として、実際には存在しないものの分析に終始してしまう可能性もあります。

ルース・ベネディクトが著作『菊と刀』(*The Chrysanthemum and the Sword*)を執筆する際、彼女は日本を訪れることができませんでしたので、彼女はデータを新聞や映画を通して得ていました。当時、アメリカ軍は戦争状態である相手国の文化をできるだけはつきりと捉えようとしていたのです。ベネディクトは入手したデータを西洋の概念である「恥と罪」によって分析しました。さて、果たしてこの『菊と刀』はベネディクトが日本文化を真に理解していたことを示すのでしょうか。この著作は広く、特にここ日本で知られています。どの本屋さんに行っても日本語版と英語版がおいてあります。ベネディクトは、文化というものを、その集団の構成員が広く共有しているパーソナリティとして捉えたり、あるいは単一の概念で文化全体を説明しようとする姿勢から批判を受けてきました。しかし、この問題はルース・ベネディクトに限ったことではありません。他の多くの学者たちも日本文化をいくつかの概念で記述したり、分析したりしようとしてきたのです。ここで私とルース・ベネディクトを比較するとしますと、ある意味では私のほうが彼女よりも勝っているとも言えます。その理由は、私はここ日本に住み、日本語を勉強し、文化的に可能な限り溶け込もうとしているためです。ただし、私が文化を分析する唯一の方法は、訓練を必要とするような文化人類学的手法などではなく、あくまで自分自身がこれまでフランスやアメリカで暮らした経験と照らし合わせるというものになります。

そして、こと比較文化となると、この問題はさらに複雑になります。それは、そこには常に2つ以上の文化が関係してきますし、似たようなもの同士を比べなければならなくなるためです。そのため、ルース・ベネディクトとまったく正反対の立場をとっているのがオランダのヘルト・ホフステードという学者です。彼はある質問紙を作成し、その質問紙を世界各国の言語に翻訳して30カ国のコカコーラの会社の従業員に送付しました。ホフステードは自分が入手したいデータを得ることができるような質問紙を作ったのです。結果を見てみると、ホフステード自身によれば、各国の

文化についての客観的な特徴を捉えることができているとし、いくつかの中心的な概念で各文化を分析しています。彼が用いている中心的な概念というのは例えば、パワー・ディスタンス(つまり人間関係の力関係や心理的な距離のこと)、個人主義と集団主義、男性らしさと女性らしさ、あいまいさの排除性、長期的視点と短期的視点の志向性などが挙げられます。

これまでの講義でこの話をしたこともあるのですが、多くの学生はこのホフステードの比較文化アプローチに対して違和感があるようでした。学生たちは、彼の研究のアプローチが「西洋的」であり、例え質問項目が翻訳されていたとしても、それらの項目は各国の文化において異なる形で理解されるのではないかと考えているようでした。この点についてはまた後で戻ってまいります。しかしながら何にせよ、ホフステードの取った価値観に注目するアプローチは、それまで行われてきた単純に気候や食習慣などを比較するアプローチとは一線を画するものであり、価値のあるものであると思われまます。

また今日の講義では、教育的でかつ面白いことを目指すとともに、ウィットや物語的エピソード、そして学術的な議論までをすべて包み込んでお届けしようと思います。ですが、今、最後に挙げた学術的な議論については上手く話を持っていかねば講義が退屈なものになってしまう危険があります。この危険を避けるため、私は最先端のコンピューター技術を駆使し、というほどでもないのですが、この退屈な部分についてはパワーポイントを使いながらお話をしたいと思います。先にも述べましたように、これから話す内容は外国人の大学教員から見た、比較文化に関する現実的な問題について、です。時折、かなり辛らつな物言いをすることもあると思います。そのときにはそれらの言葉が真に意味するところを理解していただければと思います。

今日の講義のテーマはとても伝統的で「日本的」なものです。何者かが外側から実際に経験するような「文化」と呼ばれるものを分析しようと思います。まず、文化というものの一般について、そして特に日本文化についてお話を始めましょう。皆さん、『日本人論』というものをご存知でしょうか。意味は文字通り、日本人について述べ

た論説のことを指します。古くはエンゲルバート・ケンプファーやラフカディオ・ハーンに端を発した後、ルース・ベネディクトやエズラ・ヴォーゲル、そして新渡戸稲造や中根千枝といった日本人の著作から強い影響を受けたと考えられます。この日本人論における『日本文化』という概念はとても一般的なものであるので、比較文化研究の1つの基盤となっています。これから私自身の日本での生活の様子をご紹介しながらこの比較文化の考え方や絡めていきたいと思います。ここでの比較はさしずめ、英国人の持つ assumptions, つまりさまざまな予測・予想と彼が実際に放り込まれた日本文化との比較という形になるでしょうか。その後、文化一般に関する問いに立ち戻り、私の分析が比較文化研究の一例として良いものであるかどうかについて考えていきたいと思えます。

ところで、唐突ですが、私の母語はもちろん英語です。そのため、ここまでお話ししたイントロダクションの部分と結論の部分を除いては、今日のこの講義をすべて英語で行いたいと思えます。皆さんの中には英語での講義を聞きながらついていくのがつらいという人もいたと思いますので、これからお話しする内容をまとめた英語の文章に日本語訳をつけたものをお手元にお配りしております。最後の英語のリスニング練習だと思ってください。

2. 文化と文化理解について

私はこれまで約40年間に渡って合気道の稽古を行ってきました。そして師範の段位も与えられています。日本人の友人たちの中にはこの事実を聞いて戸惑う人もいます。なぜ私のような外国人が日本の武道にそんなに多くの時間を割くのか理解できないようなのです。そして、この戸惑いが言葉になって表れるとき、2つの異なるパターンがあります。1つ目は、私が高い段位を持っていることから、「あなたは日本文化を真に理解している」と言われる場合です。そしてもう1つは、私がいくら高い段位を持っているとはいえ、「あなたは日本文化を真に、あるいは完全には理解できない」と言われる場合です。このとき、たいていは私が日本人ではないということが理由として続きます。今申し上げたような物言いの中では常に

「本当の」、「真の」、「完全な」、「日本文化」と呼ばれるものの「理解」に言及がなされます。長年にわたって合気道の稽古をしてきたことは、そのような理解の証拠とも、無理解の証拠とも捉えられる場合があるのです。そこで、今しがた明らかとなったこの問題をいくつかの単純な「問い」としてまとめ直してみたいと思います。

- A. 「文化」を「理解する」とは何か：AさんによるAさん自身の文化の理解には何が含まれるのでしょうか。
- B. そのような理解はどのようにして「本当の」、「真の」、「完全な」ものとなるのでしょうか。
- C. 「理解」という用語は認識の産物であることを暗に示しています。そうであるならば、その理解はどのようにして表現されるのでしょうか。
- D. 上の問いで想定している「文化」という用語は「国の」文化として理解されていますが、「国の」という言葉の中には何が含まれるのでしょうか。
- E. もしもBさんという、Aさんの「国の」文化を共有していない別の人が、Aさんの「国の」文化を「理解」していると言うとき、その理解はAさんの理解とはどのように異なる、あるいは異なるらないのでしょうか。

各問いについて順に議論してみたいと思います。

- A. 「文化」を「理解する」とは何か：AさんによるAさん自身の文化の理解には何が含まれるのでしょうか。

私の比較文化の授業では常にこの点から議論を始めます。その際、対象とプロセスという2つの大きな要素があります。対象とは、我々が自分の文化を理解するときに理解しているものであり、私がこれまでに教えてきた学生たちの言葉を借りれば、言語や歴史、食べ物、天皇制や平和憲法といった社会的な制度、あるいはお祭りに参加するといった活動などが含まれます。これに対して、理解のプロセスとは、我々が自分の文化を理解するときどのように理解しているかのことですが、その意味は少し曖昧です。学習のプロセスであれば客観的に捉えられそうですが、文化を理解

するプロセスとなるとただ文化の中にいるという状態から切り離して捉えることができません。つまり、例えば日本人にとっては、日本で日本人の両親の元に生まれ、日本文化の中で成長するプロセスを経ることを意味します。

上のような考え方は「排他主義的」な文化の捉え方であり、私の教えた日本人学生の中には、海外に長期間滞在する間に日本文化についての彼らの理解が乏しくなってしまったと言う者もいました。私はこの現象を文化の「グラス理論」と呼んでいます。グラスはある点で一杯になりますが、他の「海外の」文化を吸収するにつれて今度はグラスが空になっていくという考え方です。この理論には誰もグラスは1つしか持っていないという前提があります。ですが私自身、この前提は正しくないと考えています。むしろ、私は日本にいますので私はグラスを2つ持っている方と考える方が合理的ではないでしょうか。1つは常に一杯であり、もう1つは私の捉え方次第によって、半分一杯であるとも、半分空っぽであるとも言えるように思います。

興味深い問いとしては、この対象とプロセスという概念は日本文化以外の文化にも当てはまるのかという点です。以下に述べますが、日本という国は単一民族国家であり、移民はごくわずかであると考えられています。もしも今仮に在日韓国人の人々の存在を考えなければ、日本にはニューヨークやロサンゼルスに見られるような「人種の坩堝」的な雰囲気は存在しないと言えるでしょう。それゆえ、重要かつ難しい問題として、例えば、ニューメキシコに住むスペイン語を母語とするアメリカ人が自分たちの文化を理解するとき、果たして日本人たちが日本文化を理解するのと同じ様式で理解しているのかという疑問が生じるのです。

B. そのような理解はどのようにして「本当の」、「真の」、「完全な」物となるのでしょうか。

私は時折、マネジメント専攻に在学する学生に対して、日本文化を「真に」「完全に」理解していると思うかどうかについて尋ねることがあります。そうすると例外なく学生たちは「理解していません」と答えます。これはある面では、日本的な謙虚さの表れとも言えるでしょう。しかし、私

が続いて「なぜ、理解していないと思うのか」と尋ねると、問題が起きるのです。理由の1つとしては「理解」という言葉で、その言葉が表しうる以上の意味を表そうとしているためかもしれません。1つの類似する例としては、ある言語のネイティブスピーカー、母語話者に対して「真に」「完全に」母語を理解しているかと問うということが考えられるかもしれません。いかなる言語であろうと、その言語の中に無数、無限に存在する「ことば」すべてを知っている人はいるはずがありません。同様に、その言語の変化し続ける語彙をすべて知っている人もいるはずがありません。そのため、辞書は常に時代遅れのものであるとも言えます。それにもかかわらず、母語話者の言葉は彼らの「世界」「文化」を生み出すプロセスを担っています。言語についての理解は語彙などの面において完全にはなりえないということは明らかであると思います。しかしながら、母語話者並みの流暢さでコミュニケーションをとることができる程度の言語理解があれば、それ以上の知識も練習も必要ないという意味では、その理解は完全であるとも言えます。そしてこのような理解こそが流暢さの意味するところであり、非母語話者がその獲得、維持を目指して苦勞している姿と対照をなすと言えます。明らかにこのような言語理解と文化理解の間には類似点があるように思います。

C. 「理解」という用語は認識の産物であることを暗に示しています。そうであるならば、その理解はどのようにして表現されるのでしょうか。

「理解」という用語は、文化は第一義的に知識に関わるものであり、文化の理解は、例えば、日本の歴史やおせち料理や鏡開き、茶道の意味や意義を知ること、や茶道を実践できることにあるという印象を与えがちです。つまり、後者の場合、長時間正座しながら抹茶を飲むことができる外国人は「日本文化」を「真に理解」していると見なされることとなります。私はこのような考え方は、「知ること」を過剰に重視しており、誤っていると思います。文化を理解することは、茶道という活動を実践するという例からも分かるように、その文化についての事実を知ることとは別物

なのです。私が合気道を行うことができるように、誰も茶道を行うことができるのです。そしてその際、必ずしもそれらの伝統的な活動の歴史や理論を熟知しておく必要はありません。しかしながら、ここで一番問題なのは茶道や合気道を実践することができるということは、果たして日本文化を理解しているということの意味するのかという点です。

D. 上の問いで想定している「文化」という用語は「国の」文化として理解されていますが、「国の」という言葉の中には何が含まれるのでしょうか。

この問いの答えは日本人の皆さんにとっては明確であるかもしれません。私は幾度と無く日本は単一民族国家、つまり国民イコール民族であるという話を聞かされてきました。(ただし実際には、私はこのような認識は正しくないと思うのですが、しばしば「我々日本人は」や「わが国」といった言葉の中にそのような認識が如実に表れているように思います。)つまり、日本に住む日本語を話す日本人がいるからこそ日本文化があるというわけです。しかし、このような考え方は私のような人間にはまったく理解できません。

私が言いたいのはつまりこうです。イギリスの地図を思い浮かべてください。日本のようにイギリスも島国であり、長い歴史を持っています。日本の島々がかつてアジア大陸にくっついていたのと同じように、イギリスの島々はかつてヨーロッパ大陸にくっついていました。そして大昔のヨーロッパ人はイギリスにやってきた可能性もあります。同様に大昔、アジア大陸に住んでいた人たちが日本にやってきた可能性もあります。紀元前500年ごろ、ローマ人がイギリスを占領しました(因みに、当時イギリスはブリタニアと呼ばれていました)。そして占領に抵抗した現地のイギリス人たちははるか北へ、西へと追いやられました。500年後、ローマ人はヨーロッパへと引き上げ、続いてイギリスはアングロ人、サクソン人、ジュート人、そしてデンマーク人に侵略されました。どの民族もヨーロッパの民族です。その際、再び侵略に抵抗した人々は北と西へ追いやられました。さらに500年後、イギリスはさらに侵略を受けます。今度は現在のフランスであるロルマン

人による侵略です。これらのすべての侵略は国土の東と南から行われ、侵略者たちは現時の住民と混血し、文化の一部をなすこととなったのです。

しかし、一体どの文化が侵略者の文化の影響を受けたのでしょうか。イギリスは19世紀に建国され、イングランド、ウェールズ、スコットランド、そして北アイルランドの4つ地域でもって、イギリスおよび北アイルランド連合王国となりました。(日本に同様な形で名前をつけるとどうなるのでしょうか、九州、本州、四国、北海道連合帝国といったところでしょうか。)私はイングランドというイギリスのある地域で生まれ、育ちました。それゆえ私はイギリス人であり、かつイングランド人なのです。そしてむしろ後者、イングランド人としての自覚の方が強いかもしれません。通常、日本語のイギリスあるいは英国という言葉は今お話したような豊かな歴史を一切考慮していませんので、時として日本人はイギリスに住む人はすべてイングランド人であると誤解してしまうことがあります。このことはスコットランドやウェールズではとんでもない間違いなのです。

そのため、もしも上で述べたようなパラダイムを当てはめるとすると…

日本に住む日本語を話す日本人がいるからこそ日本文化がある。のであれば、イギリスに住むイギリス語を話すイギリス人がいるからこそイギリス文化があるということになります。これは明らかに間違っています。正しくは以下のようになるべきなのです。

・ウェールズに住むウェールズ語を話すウェールズ人がいるからこそウェールズ文化がある。

問題があるとすれば、ウェールズに住んでいる大多数の人はウェールズ語ではなく English、イングランド語即ち英語を話すということでしょうか。ただし、その英語には明確なウェールズ訛りがあります。同様に、イギリス語という言語は存在しませんし、イギリスに住むすべてのイギリス人はイングランド語を話すのです。そしてさらにここでややこしいのは、日本語とは違い、英語は世界の多くの国々でも話されているのです。しかしながら、私にとっては以下のような言葉は部分的には正しいこととなります。

- ・ イングランドに住むイングランド語（つまりは英語）を話すイングランド人があるからこそイングランド文化がある。

このような曖昧な言葉が部分的に正しいことになってしまう原因として、そもそもイングランド文化が何によって構成されているのかを特定することは難しいためであると考えられます。そのため、先に述べた問い A に立ち戻り、自分自身の持つ文化への理解を考えてみると、果たして自分自身の持つ文化とはイングランド文化とイギリス文化のどちらのことを考えればよいのかが問題になってくるのです。どちらの文化も想定することが可能です。もちろん、今でも 'Traditional English Breakfast' と呼ばれるイングランド風の伝統的な朝食（卵、ベーコン、ソーセージ、マッシュルーム、トマト、ブラックブディング、油で揚げたパン）を食べることはできますし、いわゆる 'English gentlemen' 「イングランド紳士」は相変わらずロンドンのサヴィルローでスーツを買い、山高帽をかぶって細く巻き上げた傘を持ち歩いています。しかしながら、例えば植民地時代にインドやアフリカから移民してきた人々は彼ら自身をイギリス国民であると認識し、イングランド、スコットランド、ウェールズといった認識をあまり持っていないかもしれません。しかしながら、私の場合、植民地時代の統治者という意味で自分のことをイングランド人 (Englishman) と思ったことは一度もありません。ただし、イングランド文化とイギリス文化を切り離して捉えることは、イギリス文化とウェールズ文化、イギリス文化とスコットランド文化の違いを特定する以上に難しいということも忘れてはなりません。ホフステードが IBM の社員に対して行った調査結果をまとめたグラフの中で、イングランド、スコットランド、ウェールズではなく、イギリスを 1 つの集団として扱っていることは注目に値します。

- E. もしも B さんという、A さんの「国の」文化を共有していない別の人がある、A さんの「国の」文化を「理解」していると言うとき、その理解は A さんの理解とはどのように異なる、あるいは異なるらないのでしょうか。ここまでの問いをすべて考えてくると、「自分

の文化を理解すること」ということ自体が必ずしもすべての文化で同じように理解されないのではないということが十分にありうることが分かります。実際のところ、私は日本という国は文化というものに対する認識が極めて特徴的な国であると思っています。例えば、日本では出身地と言葉や食べ物そして各地で文化と呼ばれているものとの間に密接な関係があります。その関係の強さは中国やインド、アメリカなどの国以上のものがあるように思います。

3. 自叙伝：日本武道を通しての日本文化

学校では私は特に活発な子どもではありませんでした。冬にはラグビー、夏にはクリケットをするくらいを除いては、私はスポーツにまったく興味がありませんでした。しかしながら、私は身体的には健康でしたし、大学に進学したときにはクロスカントリー競走、running の方の競走です、を始めました。私が大学の学部生時代を過ごしたサセックス大学はイングランドの南海岸に近い田舎に建っています。その大学周辺のなだらかな起伏のある丘は the South Downs と呼ばれ、約標高 900 フィート (275 メートル) の高さがあります。まさに走るのにはうってつけの田舎で、牛や羊、時には馬や馬に乗っている人以外には何の動物も見ることなく、ただ何マイルも草原を走ることができました。当時、週に 3～4 回は 25 マイル (40 キロメートル) の距離を時には 1 人で、時には友達と一緒に小さなグループで走っていました。

このときまで私は日本人の人と会ったことは一度もありませんでした。当時、私が日本について知っていたことといえば、歴史についての本や戦争についての話から学んだことだけでした。私は、日本は中国やアジアのほかの国々を侵略し、第二次世界大戦で負けた国としか思っていませんでした。私の日本についての認識が変わったのは、私がある聡明な日本人と出会ったときでした。その人は輸送経済学を専攻していた学生でした。少なくとも彼自身は学生であると言っていました。少なくとも彼自身は勉強をしている様子はありませんでした。その代わりに、彼は「イギリス文化」を学びながらイギリスを旅して回っていました。その様子は明治維新後の岩倉具視使節団のような

感じでした。彼は東京大学の文一を卒業し、旧国鉄（現在のJR）に雇用されていました。彼は2年間海外留学するための奨学金を獲得していましたが、実際には何の勉強も研究もしなくていいのだと彼は言っていました。彼は英語の上達を目指して努力していましたことが縁で我々は友達になりました。

英語での会話は時には大きな困難が伴いました。ですがそんな折、その友人は自分は合気道という武道の稽古をしており、東京大学合気道クラブの主将なのだと言ったのでした。当時の私は柔道は知っていましたが、合気道についてはまったく聞いたこともありませんでした。彼は合気道をイギリスでも続けたいがために、自分とともに合気道を始めてみないかと私を誘い、結果、大学に新しいクラブを作って稽古が始まったのでした。すでに柔道部は存在していたため畳の道場もありました。先にも述べましたように、私はクロスカントリー競走をいて1週間に120キロメートル以上走るほど健康でしたが、合気道の稽古をするにつけ、私はこれまで意識もしたこともなかった部分の筋肉を感じるようになりました。それにもかかわらず、合気道はとても興味深く、私にはそれまでにまったく経験したことの無いものでした。

友人は私たちの合気道の先生となり、どのように合気道をするのかを私たちに見せることで合気道を教えてくれました。説明はほとんどありませんでした。そして後になってこれが日本武道の伝統的な教え方であるということを知りました。「技を盗む」という言葉があります。これはご存知の通り、弟子が先生のすることを観察し、先生が良しと言うまで、まあめったに言ってもらえないのですが、先生のまねを繰り返すことで知識を盗むことを指します。我々の場合、主な理由は先生が英語を話すことがほとんどできず、特に「気」や「呼吸力」のような概念を説明することができなかったという状況があったためこの教え方が取られました。そこで私たちはアマチュア泥棒弟子となったのですが、私たちは盗むことが求められているものがどの程度の価値のあるものかよく理解できないでいました。しかしながら、私は彼が蒔いてくれた種が私の中でこうして実を結んだのですから、私はこの友人先生にはとても感謝しております。

その後、私は彼が極端に保守的な日本人であったということを知りました。そして彼の英語力がつくにつれて、私は先生と日本の教育制度や日本文化、特に天皇制のような社会システムについてよく議論しました。

サセックス大学は1960年代に創立された「新しい大学」であり、新しい高等教育と伝統的な高等教育の融合を目指していました。このような講堂での講義は選択性であり、学生1、2名と教員によるチュートリアル形式の教育や学生10名未満のゼミ形式の教育に重点がおかれていました。毎週、学生は図書館で自分の選んだ問題について学習研究を行い、チューターの先生を訪ねてエッセイの形でその成果を報告する、たいていはエッセイの音読をするという形になっていました。ゼミの授業ではある学生があるトピックについての学習研究の成果を発表し、ゼミの他の学生がそれを吟味精査するという形が取られていました。どちらの授業においても教育のプロセスは、教授の語る真理を受け入れ、吸収するのではなく、議論を覆すための反駁にさらされるという点では敵対的であると言えます。西洋におけるこのような形式の教育には長い歴史があり、その教育原理はプラトンのアカデミーやアリストテレスのリセに由来しています。

先に紹介した合気道の先生である日本人の友人はこのような教育形式は誤っていると考えていました。彼はより優れた代案もなく他人の議論を批判するべきではないと考えているようでした。彼によると、学生の本分はより優れた知識を持った人から学ぶことであるそうです。そしてその後初めてその知識を用いてより優れた結果を生み出すという立場になると考えているようでした。私はそれまでそのような非合理的な考え方には出会ったことがありませんでしたし、今でもなぜそのような考え方が説得力を持ちうるのか理解できません。しかしながら、ここ広島大学における教育のありようを見てきた結果、私には教育に対するそのような考え方こそが日本の大学教育、特に芸術や人文の分野の教育に対して悪い影響を与えている根源であるように思います。

このような退廃的な西洋型の教育制度はオックスフォードやケンブリッジ、ハーバードといった大学の教育、研究に主として見られるものであ

り、私はその日本人の友人がそこまで儒教的な教育方法に傾倒しているのを知って驚きました。そして東京大学では経済学を一体どのように教えているのかと思いました。もちろん、その後も革新派の友人たちと、「相手の議論の穴を見つけようとするのは必ずしも代案が必要ではないのでは」という点については激しく議論をしたこともあります。そして今でも私の考えは変わっていません。

彼は政治的な思想においてもまた保守的でした。彼は日本が行った太平洋戦争は自衛のための戦争であり、大東亜共栄圏は真に意味を持っていたと話していました。また東京裁判は、勝者の正義と、日本には当てはめることができないような西洋的なモラルに基づくものであり、極端に公正さを欠いたものであるとのことでした。当時はまだこれらの点は大きな議論にはなっていませんでしたが、日本に来て原爆や日本の戦争責任、あるいは日本の首相の靖国神社参拝についての複雑な議論などに直接触れて初めて、この友人がどれくらい保守的、あるいは右の人であったのかを知りました。

私はその友人がサセックス大学にいた2年間、合気道の稽古に打ち込みました。そして彼が私に植え付けた合気道の種は徐々に育っていきました。私は合気道の先生をさらにもう1人探しました。そしてロンドンで日本人の先生を見つけました。私はサセックス大学のクラブで合気道の稽古を続ける傍らで、さらなる稽古のため折に触れてロンドンに通いました。そしてサセックス大学卒業後、ハーバード大学に入学し、その頃には合気道が生まれた日本に来てもっと合気道の勉強をしようと心に決めていました。そのため、私は博士号の取得のために学業に打ち込みながら、自分が卒業を迎える年に日本での就職がないか探していました。そして見つかったのが広島大学の総合科学部だったのです。私は1年の任期でこちらに来たのですが、今もまだここにいます。

4. 自叙伝：日本へー強烈なカルチャーショック

私は1980年の3月成田空港に到着し、イギリスで私が教えていた日本人数名が出迎えてくれました。私はすぐに空港が軍事基地のような様子であ

ることに気がつきました。暴動を鎮圧するための特別な警察官がいたのです。私が理由を尋ねると、農家の人たちが当の成田空港建設に反対しているのだと教えられました。私は農家の人々に対してそこまで厳しい警戒が必要なのかと本当に驚きました。

私たちは高速道路を通して、新宿近くの東京郊外、東中野へと向かいました。車での旅は2～3時間でしたが、その間、私は自分がまったく文字を読むことができないことにショックを受けました。交通表示や広告が一切読めなかったのです。自分自身を言葉によって表現することにとくに慣れ親しんでいる人間にとっては、文字が読めないということは大きなショックでした。

広島にやってくる前にしばらく東京に滞在していましたが、友人たちは私にできるだけ生の日本的な経験をさせてやろうと考えてくれていました。そこで彼らが私を連れて行ったのが銭湯とこじんまりとした古いたたずまいのおすし屋さんでした。私が銭湯の洗い場に足を踏み入れると、案の定の反応が返ってきました。完全なる静寂です。そしてその場にいた人々は私の友人に私がどこから来たのかを尋ねていました。おすし屋さんに行っても同じような感じでした。ですが、銭湯とは違いただれも私をべたべた触るような人はいませんでした。まあこれは未知の存在の突然の出現にやたらと興奮する子供たちがその場にはいなかったためでしょう。しかしながら、そのおすし屋さんで私は、その後の私の日本での暮らしに大きな影響を与えることになる経験をしました。周囲の日本人の人々から、日本人で無い私が日本の食器で日本食を食べ、楽しんでいることが信じられないというような奇異な目で見られたのです。たいていは以下のようなパターンです。

相手： どこから来たんですか（どう見ても日本人ではないですね。）

私： イギリスです。

相手： あー、イングランドですか（先ほどのお話です）。サッカーは好きですか。

私： いいえ、あんまり好きではないですね。私は日本武道が好きですね。

相手： え？空手のことですか？

私： いいえ、合気道です。

相手： あー、聞いたことはあります。何か宗教のようなものではないですか？日本には長く滞在されているんですか？

私： ええ、おおよそ●年になります（●には5年から30年までが入ります）。

相手： ほー。それならもう日本の習慣に慣れておられるでしょうね。日本食は食べられますか？

私： はい。

相手： すしや刺身も大丈夫ですか？

私： はい。

相手： 納豆でもですか？

私： いいえ、納豆は嫌いです。

相手： あー、納豆は嫌いな日本人もいますからね。お仕事は何をしておられるんですか？

私： 大学で教えています。

相手： 本当ですか。何を教えてらっしゃるんですか？

私： 哲学と比較文化です。

相手： おー、とても難しそうですね。（哲学は日本では普遍的に「難しい」らしいですね。）

私はこの会話を何度と無く繰り返してきましたので、おおよそ次に何が話題に上るかの予測がつくほどです。また、私はこのような会話をそれまで住んでいたどの場所でもしたことはありませんでした。この会話は常に日本語についての話になって、たいいてい私の日本語力（明らかにそこまで高くはありませんが）の話が付け加わり、外国人にとって日本語を学習することがどれほど難しいかという話で幕を閉じます。このことは、日本人の外国人に対する固定観念の表れであると思います。そしてこの固定観念は大化の改新に端を発するもので、徳川時代に確立されたものであると思います。この点についてはまた後から戻ってまいります。

翌朝、私は新幹線で東京から京都に向かいました。私の切符は先に登場した例の、私の最初の合気道の先生が準備してくれました。彼は東京駅で私を迎えてくれたのですが、まずはラッシュアワーの最中に東中野から東京まで新宿乗換えて移動しなくてははいけませんでした。私は大きな荷物を4つ抱え、新宿までは他の友人たちにも助け

てもらいました。当時、新宿駅には英語もローマ字もありませんでした。そのため私は先生に連れられて中央線のプラットフォームにたどり着きました。同様に、東京駅では私はプラットフォームの電車のドアが開くその場所の前まで連れて行ってもらいました。私は鉄道を利用するためにそこまでの熟練が必要であることに実に驚きました。ヨーロッパにもアメリカにもこのようなところはありません。

京都までの移動の間にも新たな発見がありました。それは東京から大阪まで絶え間なく続く大きな町の中を移動しているように感じたことです。建物や道路に覆われていない地面がとても少ないという印象を受けました。京都ではブリティッシュ・カウンセルでの会議に出席し、それから広島へと1人で移動しました。暗くなるにつれて雨が降り始め、私が広島につく頃には大雨になっていました。私は日本語が全く分かりませんし、土地勘もありませんので、私は新幹線が福山を通過したあたりで電車を下りる準備を始めました。今になって分かることですが、新幹線は多くの荷物を抱えたお客向けにはできていないからこそ、誰もが荷物を宅急便で送るんですね。当時、私は宅急便の存在を知りませんでしたので、満員電車の中客車のあちこちの荷物棚に詰め込んだ荷物を回収し、何とか広島に到着したのです。

私はプラットフォームで先生方に奇妙なまでの丁寧さで出迎えていただきました。文学部のイギリス人の先生と、とても正確な英語を話される総合科学部の数名の先生方がおられたと思います。我々は駅を後にすると、今度はタクシーを待つ長い長い行列を目にしました。先生方は車をお持ちの他の先生方に連絡を取ろうと電話をかけましたが、残念ながら実を結びませんでした。結局、私たちは、私が見たことも無いような古の路面電車に乗り込むことになりました。そして路面電車に揺られながらやがて到着し、正面にSOGOの文字の着いた建物に入りました。私たちは10階まで荷物を持って上がり、レストランで西洋風の食事にあついたのでした。

その夜は会話が弾むことはありませんでした。というのもロンドンからの移動（このときはアラスカのアンカレッジでのストップオーバーでした）による時差の影響で徐々に私の体調が悪化し

ていたためです。しかしながら、出迎えてくださった先生方は私がつろげるよう、また歓迎されていると感じられるようにとさまざまな努力を尽くしてくださいました。夕食後、最後にどなたかが「それでは、ピーター・ゴールズベリー先生、お宅のほうにお送りいたします」と仰いました。私は彼の言葉が意味することが理解できませんでした。そして私たちは郊外へと車で移動し、私の家に着きました。それは大正時代に立てられた大きな西洋風の家で、広島原爆に耐えた建物でした。中に入ると、私は絶対にその建物からあまり離れてはいけないと言われたのでした。次の日の朝にはまたどなたかが私を大学まで連れて行ってくださり、学長とお会いすることになっていました。その夜、私は日本に来たことは正しい判断だったのだろうか複雑な気持ちのまま眠ったのを覚えています。

さて翌朝、私は事務の方が冷蔵庫の中に用意しておいてくださった卵やベーコン、パンなどの西洋食材で朝食をとりました。ある先生が私を広島大学の東千田町キャンパスに来るまで送ってくださいました。正直に言わせて、最初に東千田キャンパスを見たときにはショックを受けました。建物は古く、そこには私がそれまでにサセックスやハーバードで見てきたような広々とした管理の行き届いた感じはありませんでした。私はロンドンでも大学のすぐ近くで数年を過ごしましたが、ロンドン大学でさえ広島大学よりは手入れがされているように思いました。

学長とお会いして、(その後しばらくして知った)いわゆる挨拶というものをした後に、私は他の先生方とお会いし、研究室をいただき、近くの日本食レストランで昼食(全く読めないメニューから選んだ定食)を取りました。それから町の中をめまぐるしいスピードで(買い物したいお店すらも飛ばしながら)そごう紀伊国屋、(閉店してしまった)本通りの丸善、(現在のデオデオである)第一電気と案内をしてもらいました。その際、お店の人から名刺を渡してもらったのですが、その後この名刺が決定的に重要になったのでした。このエピソードについてお話しましょう。

一通り案内をしていただく中、私は赤の24番のバスで自宅から町に出ることができ、町の中心部に用がある時には本通りか紙屋町で降りるのが

もっともよいということを教えてもらいました。そしてその日はまだ授業が始まるまでには時間がありましたので私は広島の町を自分ひとりで探検してみたのでした。私は本通りに戻り、24番のバスに乗ってみました。ところがなんとということでしょう。周囲は暗くなり始め、ラッシュアワーが始まりました。バスは満員で私は途切れることなく流れるアナウンスを全く理解することができません。そのため私は自分が降りるバス停を乗り過ごし、その路線の終点まで行ってしまいました。私は自分がどこにいるのか全く分からず、誰かに英語で自分の家に戻る方法を尋ねなければならなくなりました。まず私は年配の人については、おそらく英語は全く判らないだろうと考え避けることにしました。そして大学生らしき人を探しました。犠牲者を選び、彼を呼びとめ、できる限りはっきりと自分の名刺を見せながら話しました。

"Excuse me I am lost. Can you help me to find this address?"

結果はまさに劇的なものでした。その若人は驚き、一時的にパニックに陥ってしまいました。彼は私の差し出した名刺を手に取り、とつとつと声を発しました。

"Pureezu ueitaminito."

そして彼はどこかへと消えていきました。そのため私はただ彼が再び現れるのを待つことしかできませんでした。その後、再び彼が現れ、一言も言葉を発することなく私を自宅へと連れて行ってくれました。徒歩で20分ぐらいでした。すると彼は明らかに安心した様子で別れを告げ、そそくさと消えていきました。私は心底驚きました。彼の英語がとてもひどかったので、私は自分の授業でもあまり学生には期待できないと悲観的になりました。また次のセクションでこの点についてのカルチャーショックをお話します。

もちろん、私は徐々に広島大学に、そして広島という町に慣れていきました。私はたくさんの外国人の友人や、日本人の友人とともに徐々にカルチャーショックを乗り越えてきました。このカルチャーショックというものについて少しお話した

いと思います。というのも皆さんの中にはその経験が無い人もいるかもしれないためです。私はフランス、アメリカと住んでいましたので、日本に来るまでには多少なりともカルチャーショックを経験済みでした。同じ言葉が話されているアメリカでさえ、カルチャーショックはありました。

カルチャーショックは、ある人が未知の文化の中で十分機能できないときに起こります。そこにはさまざまな側面があります。言語、習慣、あるいはそれらが根ざしている価値観などです。ここ広島でよくあるのはビジネスマンの夫婦のケース（特に妻が外国人の場合）です。夫は同僚たちとともにいる時間が長く、時間の多くを仕事に費やします。彼らの妻は家に留まり、子供が学校に通っている場合、おかしな国に閉じ込められたような孤独感を持つことがあります。広島では言葉がカルチャーショックの最も一般的な原因となりえます。その理由は東京などの大都市に比べると英語が流暢に話せる日本人の数が少ないということにあります。私もおかしな状況にいます。日本に来るまでは日本語を勉強することは全くありませんでしたし、日本に着てからは逆に日本語を勉強する気がなくなってしまいました。しかしながら、広島で生きるためには幾分かの日本語の知識は必要となります。これまでに何度か奇妙な出会いがあり、YMCA に日本語を勉強しに行ったこともあります。その後、私の教え子に日本語教師役をつとめてもらうようになり、現在に至るまで代々この日本語教師の任務は引き継がれてきています。

カルチャーショックにはいくつかの段階があります。(1)新しく出会った文化が新鮮で不思議でその文化が好きになります。(2)続いてその文化が新鮮で不思議なので嫌いになります。(3)その文化が新鮮ではなくなり、理解できるようになって再び好きになります。(4)その文化が新鮮ではなくなり、あまりにも理解できすぎるようになって再び嫌いになります。(5)ある種の諦めでもってその文化を受け入れるようになります。私自身はおそらく、希望的観測としては、この最終段階に近づきつつあるのではないかと思います。

ホフステードはその文化で望ましいとされること（人々が自分たちがあるべきと考えている価値）と実際に望まれていること（人々が実際に持っている価値）との間の緊張の根本には社会的

な価値観の体系が存在することを強調することで比較文化研究を前進させました。価値観の体系というのは容易に変わるものではありません。私は日本文化の持つ価値観を数多く受け入れてきました。そのためイギリスやオランダの友人たちと話をしていると、時々「日本人になったね」などとかかわれたりします。しかしながら、未だに日本文化にうんざりすることもあります。日本を去ろうとまでは思いません。

例えば、私が会ってきたほとんどの日本人はたいてい外国人に対してとても優しく、さまざまな面で助けになってくれます。しかし先にも述べたように、私たちは常にはっきりとした「外人」というカテゴリーによってひとまとまりにされます。このことはあたかも、外国人は日本人のような考え方をしないので、即ち全員同じような考え方をすると、思われているように見えます。このことはたいてい私個人のレベルで感じることなのですが、私は自分の日本人の知り合いもその他普段の社会生活で会う人々も、私が日本に住んでいる事情は彼らが日本に住んでいる事情とは異なるものと考えられているように感じます。彼らは日本に住んでいますし、私も日本に住んでいるのです。

特に広島大学が外国人教員や外国人学生に対して提供しているサポートはもっと充実させるべきだと思います。例え老朽化しているとはいえ、東千田キャンパスにはコミュニティーとしての一体感がところどころに表れていました。特に私のかつていた English Department ではそうでした。連絡室という大きな会議の場が研究室に近接して存在し、そこにはいつも誰かがいてちょっと話をする場所になっていました。東広島への移転は事実的にこのような大学人としての生活に欠かせない部分を破壊してしまったよう思います。そして社会科学研究科が東千田キャンパスに戻された現在でもまったく修復されていません。もしもマネジメント専攻が多くの留学生を抱えるならば、何らかの課外におけるサポート体制を整えなければ問題が起きることになると思います。

5. 自叙伝：日本一大学英語教育の奇妙な世界

私が最初に広島大学に来たときには、私は英語の授業を教えました。そのうち2つは英米文学特

別演習、英語名が Special Seminars in English and American Literature というものでした。私は、この授業が名前とはまったく違い、Seminars と言いつつゼミ形式でなく、Special と言いつつ特別でもなく、そして English and American literature と言いつつ文学をいっさい扱わないということを、本当に妙に感じました。その後、私はこれらの授業がこの名前ではなくてはならない理由を知りました。それは他学部の学生がこれらの授業を受講する際、その授業名が彼らがそれぞれの学部ですでに受講している授業の名前と異ならなければならないためというものでした。これらの授業は私の教えていた一般教養の英語の授業を補完するようなものでした。このことは広島大学が言語教育の文化的な側面をどのように捉えているのかを表していると言えます。

さて、私が広島に向かう途中、京都で途中下車したときのことで、ブリティッシュ・カウンセルの人たちから日本人大学生に英語を教えるということはおそらく、私がそれまでに行ってきた英語教育の経験とは全く異なるものになるだろうと忠告されました。しかしながら、理由までは教えてもらえず、私は自分でこれらの忠告の意味を理解しなければなりません。広島大学に来て最初に不自然に思ったのは、英語学部の他の先生方が私と英語で話すことを、あるいは私と話すこと自体を極端に避けるということでした。実は、先生方は英語を話すことが苦手であるということがこの現象の根源であることを後から知りました。しかしながら、先生方は英語の先生なので、もしも英語を上手く話すことができないのであれば、その学生たちのレベルは一体どうなるのだろうか、と考えました。

日本以外のどの国でも、リスニング、スピーキング、リーディング、ライティングという言語の4技能は今述べた順にすべて教えられています。まず、リスニングからはじめ、聞いた内容について話すことに学習は進みます。少なくとも私は、英語教員にとっては話し言葉こそがすべての言語力の基礎であると教えられてきました。ですが、日本ではそうではないようでした。その主な理由としては大学入試において求められる英語力が挙げられると思います。サセックス大学で出会った最初の合気道の先生はかつて、東京大学の文一に

入学するために大変な量の勉強をしたものだと言っていました。入試勉強は幼稚園から始まり、すべての学校教育の中で継続的に努力をされたそうです。彼はとても聡明でこの制度を突破するスタミナを持っていましたが、明治時代以来の日本の教育制度の特徴である大学の格付けシステムのため、広島大学の学生もまた、東京大学ほどではありませんが、同様の入試勉強が必要になると言えます。

もしもこのような日本の教育現場の現状を私自身の学習経験と比べるとしますと、大学入試の準備を始めたのは11歳のときでした。私は地方の公立小学校から私立の学校へと転校しました。私が学習しなければならなかった言語はラテン語、ギリシャ語、フランス語、ドイツ語の4つでした。日本と同様に、これらの言語はすべて文法と訳読によって教えられました。しかしながら、私はその後フランスで3年間過ごし、流暢にフランス語を話し、読むことができるようになりました。それにもかかわらず、私はサセックス大学に入学し、英語と哲学を専攻として勉強し、外国語の学習は必修ではありませんでしたが、言語を専攻したい学生は1年間、大学に在学しなければなりません。その年は丸々留学であって、帰国後その目標言語で論文を書くことが求められるのです。履修可能な言語はフランス語、ドイツ語、スペイン語、イタリア語、ロシア語でした。サセックスには言語センターがあり、学生は特定の試験によって話し言葉における十分な流暢さを身に付けるため各自で努力することが求められていました。結果として、言語を専攻した学生たちは全員、その言語のすべての技能において流暢になっていました。

私がハーバード大学、その後ロンドン大学に在籍していた頃、同じことが日本語や中国語といった東洋言語にも当てはまるものと考えていました。ロンドン大学の東洋・アフリカ研究学部 (School of Oriental and African Studies (SOAS)) ではすべての常用漢字を2年生までにマスターし、その学部の日本人たちを相手に日本語で授業ができるようになることが求められていました。おそらくこの学部がイギリスの中で最も優れた日本語教育を行っていると思います。

広島大学での英語教育と以上の話を比べてみる

と、明確な違いがあることが分かります。最も大きな違いは大学に入る前の時点で、学生たちは10年間の英語学習を行っています。もっぱら教育はリーディングとライティングについて行われています。そのため、私のような英語母語話者が担当する必修の英語の授業を聴講するとなると、また口頭でのコミュニケーションに重点が置かれるとなると、学生たちは自分たちは何をすればよいかわからず、フラストレーションがたまるという感じがしばしばあります。

生活も落ち着き、自分の所属している学部の状況がはっきりとつかめてくるにつれ、私は自分が広島大学で何をすることが求められているのかが分かり、そして日本語を勉強する気が無くなっていきました。私は自分の役割は言語学習の「解放」理論に基づくものであると悟りました。つまり、学生たちは英語の文法や文構造などを高等学校でずっと勉強し、(うまく行けば)彼らが望む大学に入学するという目的を達成することになります。その上で、学生たちは必修の一般教養の英語の授業を受けることになり、そのうちのいくつかを担当している母語話者の仕事と言えば、それまでの10年間に積み上げられてきた大きな潜在的能力を開放することであると思われまます。そこで学生たちは自然と英語を、まるで歌いだすかのように話し始めるようになり、教室の中で学生同士あるいは教員と楽しくコミュニケーションをとるようになります。その際、1つの要素として英語の教員は目新しく、純真であって、日本的なものに毒されていないのです。現に目新しさについては、これを保つために学部によっては数年ごとに母語話者の教員を変えるという措置を取っているところもあります。

念を押しておきますが、物事は今話したようにはうまく行かないものですし、私がやってきた当時の広大では実際にうまく行きませんでした。私が最初に担当したのは60名の歯学部の学生のクラスでした。60名です。にわかには信じられません。そして私の *sawayakana* 自己紹介には「わからん」という嘆きの大合唱が返ってきたのでした。学生たちは一貫性のある英文を作るために2~3語をつなげることすら現実的には不可能な様子でした。また別の教育学部・文学部の学生を対象としたより小さなクラスでは状況は幾分か

ましでした。しかし、特に文学部の学生たちはまるでそれが精神的な支えであるかのように辞書を引きながら、英語のテキストをすべて日本語に翻訳するという習慣を持っていました。1語ごとに辞書を引いているさまを見て、私はなぜ先生方が1冊の本に何ヶ月も、時には何年も掛けるのかが分かりました。

実際に、退職を迎えるときの1つの楽しみとしては退職パーティーに参加するということがあります。私のかつての教え子たちがすでにそのようなパーティーを開いてくれました。そのパーティーは教育学部のかつての英語教育学科の学生たちが開いてくれました。彼らのうちの多くは今では高等学校の英語の先生であり、参加者全員が私が日本に来て最初の数年の間に教えた学生たちでした。彼らのうちの多くは、当時の私の彼らに対する期待値、要求はとても高く、彼らにとっては到達不可能であるほど感じるほど難しかったと言っていました。私としてはむしろ、彼らは本当に一生懸命やっているのだらうかと思うこともあったのですが…、不思議なものです。

なにせよ、私は何を教えるかについて完全に任されていたので、そのような大規模のクラスで英語の会話練習を取り入れるのを止めました。それでもなお学生たちにはスピーキング技能を教える必要がありましたが、日本人学生動詞がベアになって人工的な「会話」を行うという以外の方法を考えることにしました。

広島大学で長年にわたって教え続けてきましたが、特に総合科学部の言語教育は徐々に改善されてきたように思います。ライティングとスピーキングのクラスは小規模になり、これによって学生一人ひとりに目が行き届くようになりました。しかしながら、このような措置は、日本の文部省、文部科学省による高等学校の学習指導要領の改訂によって生じた言語能力の全般的な低下に対する対処として取られたものでした。私は過去20年にわたって大学入試個別試験の採点を行う中で直接的にこの学力低下を目の当たりにしています。そのため、私の母語である英語を広島大学で教える方法は未だに改善され続けることが必要となっています。このように言語教育そのものの以外の「政治的な」要因も影響してくるのです。続いて次のセクションではこのような「政治的な」要因をい

くつか考えてみたいと思います。

6. 自叙伝：広島大学：建前・本音，うち・そと，国際化の盛衰

日本人は、日本という国は単一民族国家であると考えており、外国人にとっては居場所を見つけることが難しいということはすでにお話ししました。日本文化では、以下に述べる3対の概念が特に重要であり、日本人論でも詳細に扱われています。3対の概念とは「うち・そと」、「建前・本音」、「表と裏」です。日本人心理学者、土居健郎はこれらの概念は日本のアイデンティティーの根源であると述べています。ここでは最初の2つについて、特に広島大学の国際関係との関係で取り上げたいと思います。

私が広島大学の正式なテニユア教員となつてからは、私はほぼ一夜にして、純粋な英語母語話者から一人前の日本人研究者として振舞うことが求められるようになりました。総合科学部では日本人教員と外国人教員の間には扱いの差は全く無かったことをうれしく思います。全員が大学組織の部分をそれぞれ担い、つまり部会や委員会などにおいて他の日本人の先生方と一緒に働くことが求められるようになっていきます。数年にわたって私は学部の国際交流委員会に加わり、委員長を務めていました。その間、私は全学の国際交流委員でもあり、独立行政法人化による急激な改革の前年度にこの全学の委員会の副委員長も勤めました。

それにもかかわらず、外国人教員の間には一定の格差があり、このことは外国人教員の不満に繋がっていたのですが、大学は特にこの点を改善するための方策は採ってきませんでした。私が正式な教授となつたころは、総合科学部は全学の学生に対する一般教養教育に大きな責任を負っていました。現在でも教養的教育という名前において、この状況は変わっておりません。

1973年に総合科学部が創立された時には、他学部から教員のポストをいくつか借りることができました。しかし、徐々に学生数が減少していくにつれて、これらのポストは本来の学部へと返さなければなりません。具体的には、教員が退職しても新しい教員が補充されないということになりました。このようなポストの返還を可能な限り遅らせるために、とても複雑な戦略がとられま

した。総合科学部は一定の期間の間、外国人教員を講師か助教授（現在の準教授）までしか昇進させることができなかったのです（日本人教員についてはこのような措置をとることはできません）。私自身もそのような外国人教員を2名ほど選考する立場になったことがあるのですが、その際すぐに大きな問題に直面しました。ポストは最大で3年任期であったはずなのですが、不思議なことになぜか延長が可能になったのです。そして何年間延長できるのかについては不明なままなのです。その結果、このような条件の下で広島大学にやってきた外国人教員たちはジレンマに陥ることになりました。彼らは年度ごとの契約更新を必要としないという意味で‘regular’な「普通の」教員でありながら、彼らは日本語が話せないという理由で学部の意思決定のプロセスに加わるができなかったのです。しかしながら、外国人教師のほうもどれくらいの期間広島大学に在籍できるのか分からないこともあり、日本語を勉強しようという彼らの動機付けも低いものでした。その結果、教員には2つの異なるレベルが存在するようになってしまいました。即ち、身分が正式に保証された日本人教員（および日本で暮らすことを決めた私のような外国人）と身分の中途半端な外国人教員の2つです。彼らのように、潜在的に終身雇用でありつつも、実際には身分の明確でない教員たちが総合科学部に長く留まるはずも無く、また広島大学の行く末についても特に何の意見も持たないというのは当然の成り行きだと思います。

私にとっては、このことは「うち・そと」そして「建前・本音」の極端に不幸な例となりました。教員を選考する際、公には、これらのポストは正式な広島大学の教員としてのポストであり、授業とともに部会や委員会などの大学運営に関わる業務（外国人教員にとってはまったく想像がつかないでしょうが）も行うことになる周知しなくてはなりません。そうすることで建前が何とかなります。そして本音はこれとは異なります。学部としては人員数を適正に保つためにはそのようにして教員を雇用するしかありませんでした。実際には、その採用された当の本人以外の全員が、彼または彼女が実際には同じレベルで雇用されているのではないことを知っていたのです。そして私が学部長を1年間務めていたとき、このように

して採用された外国人教員の1人に対して、年度末に雇用契約の更新ができないということを伝えなくてはならなくなったのでした。その先生は私のことを大きな制度・システムの一部であると感じたようで、私のことを許してはくれませんでした。

広島大学の素晴らしいことには、各学部には、必要に応じて雇用期間を変えつつも外国人教員に日本人教員と同じ身分を与えることを認めていますし、また日本人にも外国人にも同様に限られた終身雇用制度が適用されています。しかしながら、このようなシステムは全学で一様ではなく、部局、学部によっては未だに外国人教員には任期制が維持されているところもあります。このことはある種の望ましくない差別であると思われま

す。全学の国際交流委員会では大学の国際交流への取り組みについて検討していました。委員会はいくつかのグループに分けられ、私は日本人教員の海外研修と外国人教員の任用について検討するグループの中に入っていました。このグループは（ワーキンググループと呼ばれるもので、よくワーキングと省略されます）何時間もの会議を開き、その経過は長々とした報告書にまとめられ、文部科学省のヒアリングを受けるために東京へも行ってきました。

この活動と平行して大学の国際化についての意識が調査され、副委員長2名が報告書のとりまとめを行いました。この2名の先生方は詳細な調査を実施して、報告書とともにアクションプランを作成しました。しかしながら、これらの成果は大学の独立行政法人化の波に飲み込まれ、現在ではめったに話題に上がることはなくなってしまいました。

広島大学の歴史において、私は定年退職を迎える年齢まで広島大学に勤めた初めての外国人教員であると思っています。広島大学は外国人研究者を招聘したり、あるいは制限付きの契約で外国人教員（教授を含む）を雇用したりしてきました。そして契約期間が切れた後には彼らは彼らの大学に戻るようになっていました。しかしながら、広島大学に正式に採用されている外国人教員の数はとても限られたものになっています。実際のところ、先に述べたワーキングが調査したところ、大

学全体でそのような外国人教員は3名しかいないことが分かりました。2名は総合科学部所属で、もう1名は法学部所属でした。一方で大学は留学生を大量に招き入れ、学生を海外に送り出すことの無いまま、外国人教員の数は限られており、終身雇用の外国人教員の数はもっと少ないという状況があります。次に起きたことはとても衝撃的でした。報告書は決して虚偽の情報を含んでいるわけではないのですが、広島大学が国際交流や国際意識の面で特に先進的な大学として見えるようにデータの示し方が工夫されていたのです。その結果、広島大学は文部科学省から東京大学、名古屋大学に続いて高い評価を受けたのです。この一連の流れを経験することで私は自己点検評価のプロセスの妥当性に対して多少なりとも疑問を感じるようになりました。

それでは、そろそろ国際化とは何かということについて考えてみたいと思います。私の意見としては、この面において広島大学は日本という国のミニチュア版であると思っています。皆さんご存知のように、国際化という言葉は「国際」という言葉の最後に「化」を加えたものです。広島においては、国際化という言葉は1994年のアジア大会が開催された折に一般的なキャッチフレーズになりました。そして、大会の参加国はそれぞれさまざまな地域に分かれてもてなしを受けるという形が取られました。このこと自体は国際関係を深めるためのとても優れた実践でしたし、アジア大会の参加国はそれぞれの受け入れ先に対してよい印象を持って広島を後にしたと思います。しかしながら、私はこの取り組み自体が国際化、あるいは「国際的になること」の優れた実践であったかと問われますと、疑問が残ります。

国際化という言葉は英語で“internationalization”と訳すことができますが、私はこの言葉は明治維新後に生じた「西洋化」（“westernization”）と同じ形で理解されなければならないと思います。日本は当時、イギリス、フランス、アメリカなどの列強諸国と肩を並べるためには、幾分かは「西洋化・近代化」する必要がありました。しかしながら、日本における当時の「西洋化」はとても表層的なものであり、日本はアジアのリーダーとなる指名を負った唯一で特別の存在であるという深い信念を常に一方で持っていました。そしてまた、

第二次大戦後、マッカーサー元帥の元での連合軍の統治による「西洋化」もこの日本人の信念の核を突き崩すことはできませんでした。

私はこれまで日本以外の国で“internationalization”という言葉に出会ったことは一度もありません。ヨーロッパでは特に絶対に使われない言葉です。イギリスは慣習的にイギリス海峡を渡ってきた人たちに対して一定の不信感を持ちますし、サッチャー元首相はヨーロッパとイギリスをつなぐトンネルの設置に乗り気ではなかったといわれています。一方、ヨーロッパ人はといえば、イギリスのことを市民社会ヨーロッパの偏狭の地に存在する国で、このようなイギリスの地理的、歴史的な位置づけはイギリス自身にはどうしようもない事実であると考えています。それにもかかわらず、イギリスはヨーロッパ連合に加わっていますが、これは決して「ヨーロッパ化」や「国際化」を標榜してのことではありません。イギリス人たちはすでに自分たちのことを最初から十分に「国際的」であると考えているのです。

私のヨーロッパ人の友人たちには共通の態度というものがあるように思います。彼らは「国際化」を彼らがしなければいけないことは決して考えていません。その理由は彼らはすでに十分に「国際的」であるため、それ以上何をしなければいけないのか理解できないのです。私がヨーロッパで開かれる国際合気道連盟の会議に出席したときにも、誰もが平等に受け入れられていました。その場では決して誰かが“foreign”「外国人」、あるいは“not fully one of us”「私たち以外」であるというために、待遇に差があるということとは決してありません。そのような会議の場における日本人はといえば、例外なく日本人の集団で集まって、日本人以外の人間を何か「外部的なもの」として見なすのです。この現象の1つの理由は合気道が日本の武道であり、合気道という武道の繊細な文化的表象の内側にいてこそ心が落ち着くのかもしれません。しかしながら、もう1つの理由としては彼らが外国にいて、そのような合気道の文化的なニュアンスまでは理解できない人々に囲まれているがために、そのような場で心が落ち着かないのかもしれません。

私はしばしばヨーロッパに行くことがあります。その際、いつもどの飛行機会社を選ぶかで悩

みます。私は日本航空 JAL、エアーフランス、オランダ航空 KLM の3社のカードを持っていますが、オランダを訪問することが多いのでたいていは KLM を利用します。飛行機の中ではいつも、プロのガイドさんに引き連れられた日本人観光客の集団を目にします。ガイドさんたちは常に建前モードでお客さんたちに対して延々と説明を続けます。その様子はまるで、普段の安全な世界の外側に集団で冒険に出かける、あるいは見知らぬ池につまさきをつけるといった感じです。ヨーロッパでは、そもそも誰もが最初から同じ池の中に入っていますので誰もが平等に濡れている一方で、です。

私はこのセクションでのお話を広島大学に対してもっと外国人教員を雇用することを切にお願いしながら、まとめたいと思います。私はハーバード大学とロンドン大学で学んできましたが、両大学とも国籍に関わらず誰にでもポストを開放していました。広島大学も同様の制度を採用することが必要になると思うのですが、そのような兆候はいまだ見られません。結果、私というある意味でのパイオニアに続く外国人教員が次々と現れるとは期待できないように思っています。

7. 自叙伝：日本：オモテとウラ、岡本殺人事件と笹川良一

1987年に総合科学部長が研究室で殺されるといふ事件がおきました。当時学部長であった岡本先生がナイフを持った何者かに襲われ、腹部を数回刺されたのです。私はそのとき自分の研究室にいて、個人的に日本語を友人から教えてもらっていました。私たちは夜の9:30に正面玄関から建物を出ました。丁度私がエレベーターから降りたとき、左手にちらと目をやると学部長質の電気がついているのが見えました。私は「学部長先生は遅くまで仕事をしていらっしゃるなあ」と思い、建物を出てバイクで帰宅しました。

翌朝、大学に出勤すると警察が総合科学部に非常線を張っていました。NHKや民放各局のレポーターたちがたくさんいて、だれかれなしに何が起きたのかを尋ねていました。私は警察の人にただ学部長が亡くなったとだけ告げられ、通用口から建物内に入りました。もちろん、その事態にはとても驚きました。午後になって、緊急の会議

が教育学部で開かれました。そして報道関係者に対して何も情報を漏らさないことが申し合わせられたのでした。予想通りですが、建物を移動する間、レポーターたちにべったりと付きまわりました。私はその事件の少し前にNHKのテレビインタビューに出ていましたので、そのときのレポーターは私を見つけると、私が答えることができるはずも無い長々とした質問のリストを持って私のほうに駆け寄ってきました。そんな状況の中、そのときの緊急会議では新しい学部長も選出され、その後、私たちは教育活動、研究活動の日常の業務に徐々に戻っていきました。

しかしながら、警察はその殺人事件の捜査を続けていて、総合科学部の教員全員が幾分かの容疑をかけられていました。私はその事件のあった時間に建物内にいたということもあって、容疑者として何度も数時間にわたる取り調べを受けました。警察の人たちは常に丁寧で親切でしたが、私が会った検察官の人は違いました。その検察官は私は一日中待たせたり、私の「事件のあった夜9:30に学部長室に電気がついていなかった」という風に証言を何とかして覆そうとしたのでした。私は何とか英語の言葉を尽くして繰り返し証言を覆すことを拒否しました。そしてやっと家に帰してもらいました。警察は最終的にある助手の方が逮捕され、彼はすぐに広島大学の職を解かれました。刑事裁判の後、彼は懲役12年が確定しました。

なぜ、その助手の方は学部長を殺害したのでしょうか。教員による会議では大学の昇進システムにおける特に小講座における助手の扱いに議論が集中しました。より伝統的な学部においては講座主任は教授であり、その下には助教授が1人、さらに講師が数人いてから、最底辺に助手がいるという形になっていました。これらの職階ごとの人員構成は見直されつつありましたが、それまでにすでに長い時間を助手として努めてきた先生方の職階を上げることが年齢に鑑みて難しいということを危惧する声もありました。私の所属していた英語学科はずっと大きな組織であり、人員構成も全く異なっていました。まず実験を行うということはありませんので助手は1人もいませんでした。昇進については当時まったく問題は無かったようでしたが、実際のところ、入学者数の減少に

伴って現在これが問題になってきています。この側面において、広島大学は海外の大学の水準に近づいてきています。

私はこの助手の解雇を聞いたときに感じたのはその決定のすばやさでした。私は有罪と決定されるまでは無罪と推定される司法制度を当然であると思っていたのですが、広島大学は彼が有罪と断定されるずっと前の段階でこの懲戒措置を決定したのでした。もしも彼が無罪だったならば一体どうなるのでしょうか。私はこのことをある同僚に話したのですが、彼によると私は日本文化が分かっていないとのことでした。彼の説明ではつまり、警察は確信を得るまでは逮捕はしないものだからということだったのですが、この説明は私には理解できませんでしたし、今でも理解できません。

このことは日本の裏側であり、外国人にとってはよく分からないものです。私はルース・ベネディクトが『菊と刀』の中で論じている「恥」の文化の一例であると思います。個人の権利を保護することよりも「和」を保つことのほうが遥かに重要視されるというこの実態は、日本がどんなに「国際化」を高らかに歌い上げても誰も耳を傾けない1つの理由だと思います。捕鯨問題と同様に、日本の司法システムは単なる理解では不十分になってしまうような文化的な要素を多分に含んでいるのではないのでしょうか。海外の代表査察団が日本の刑務所のシステムを調査に来ると、彼らは日本の制度は人権を十分に保護していないと口をそろえて言います。同様に、日本の法務省も一樣に、外国人には日本文化が「正しく理解できない」だけで、日本の刑務所のシステムは十分に人権を保護していると答えます。このコミュニケーションはコミュニケーションにならないまま、すれ違ってしまっています。私はこのような現象こそが比較文化が単なる理解とは異なることをはっきりと示していると思います。つまり理解の根底には幼少時代から形成されてきた、そして容易には変化しないような価値観の体系があるのではないかと思います。

もう何年も前になりますが、他にも私は日本の裏側を垣間見たことがあります。すでに述べましたが私はクロスカントリー競走をしていました。日本に来てからも私はクロスカントリー競走を続

けていたのですが、結局は路面の硬さに耐えられず止めることにしました。それまでは、吉島を回り海岸沿いの道路を走っていました。いつも夜に走っていたのですが、ランニングウェアを着た外国人の姿が居酒屋から出てきた酔っ払いの見世物になっていたのを感じましたので、そのうち朝に走るようにしました。私が刑務所のそばを走っていると、ある朝、道路が高級車と強面の男性の集団によって事実上ふさがれているという場面に出くわしました。私は可能な限りの明るさで「お早うございます」と挨拶をするとその強面の男性の集団はさっと道を開け、私を通してくれました。その後、私は授業の中で学生たちにこの出来事について尋ねてみたのですが、彼らは「先生、それはとても危なかったですよ」と言いました。どうやら私はやくざの「出迎え」に遭遇し、彼らは丁度帰途につくところだったようです。私は人がどこに行こうがそれは個人の自由ではないかと学生たちに言うと、彼らは私を哀れむような目で見て、こう言いました。「はい。建前はそうですが、やくざについては、『君子あやうきに近寄らず』ですよ。」

このやくざとの遭遇は更なる問いに繋がります。すでに私が何年も合気道の稽古を積み、何年も国際合気道連盟の役員を務めてきたことは述べました。合気道は家元制度のようなものに則っていて、その頂点には道主がおられます。私が国際合気道連盟の役員に選出されたときのことですが、翌朝フォーマルなスーツとネクタイをして名刺を持ってくるように言われました。そしてその際に強調されたのが、合気道人としての私個人の名刺ではなく広島大学の名刺を持ってくるようにということでした。私はとても重要な社会的な役割を果たすことになりました。我々4名は新宿から公用車で赤坂の小さな建物へと向かいました。我々は、どこかで見たような強面の男たちがいる控え室へと通されました。程なくして、我々はある部屋へと案内され、巨大な机の後ろに座った白髪の男性と面会したのです。我々の紹介がなされ、そして私は名刺を渡すように言われ、その机の奥の男性に名刺を渡しました。彼はそれをじっと見て、うなずき、それを私に返しました。その後、さらに挨拶が続き、面会が終わって我々は合気道本部へと戻りました。私はその白髪の男性が

誰だったのかと尋ねると彼は笹川先生であると言われたのです。私は「先生」というのは学校や大学、道場などで教えている人たちを指す言葉であると思っていましたので驚きました。

後になって、私はさらに色々な本を読み、さまざまな人に尋ねることで、笹川氏がどのような人であり、なぜ合気会に多額の資金を提供していたのかを知るに至りました。確かに笹川氏は多額のお金を寄付していましたが、合気道界としてはこの事実を、特に海外の人々には公表したくないという空気があったのです。というのは、もしも海外の人間がこの事実を聞けば、合気会はいわゆる戦争犯罪人からお金を受け取っていることにびっくり仰天してしまうためです。

8. 自叙伝：日本武道というおかしな世界

合気道はとても興味深い武道です。合気道は外国人に「国際化した」日本文化の小宇宙を示しているように見えます。私にとっては、広島大学のもつ文化性との類似性も無視することができないほどに感じております。

合気道は大東流と呼ばれる柔術から派生した比較的新しい武道です。その大元の起源については明確ではありません。清和天皇の時代にまで遡ると主張している人もいれば、江戸時代末期に会津藩で生まれた武田惣角という人によって生み出されたと主張している人もいます。この武田という人物は日本全国を旅しながら、自分の技術を他の武道を修めている武道家たちを相手に試して回っていたとされています。実際には彼はとても嫌な人だったようです。武田が北海道に滞在していたとき、植芝盛平という紀州からきた男が彼の元を尋ねました。植芝は豊かな農家の生まれで自分は人生の中で何をすべきか悩んでいました。そして、彼は政府による北海道の開発計画によって数年間を北海道で過ごしていた折、この武田から柔術の訓練を受けたのです。その後、植芝は精神的な指導者にであい、彼の弟子となります。その指導者の名前は出口王仁三郎であり、彼は大本教という当時の新興宗教の創始者の1人でした。植芝は大本教の信者たちに柔術を教えました。そしてまた植芝は大本教を修め、彼の武道を大本教の言葉で解説しようと思いました。彼は、自身の武道を「宇宙の調和に到達し、まさに生まれ出ようと

している新世界に貢献するための武道」として位置づけました。

植芝は人並みはずれた技の人であり、日本帝国海軍内の大本教の信者の出資によって1927年に上京することになりました。新宿に道場を開き、内弟子を集めました。その後、植芝は陸軍将校に武道を教え始め、最終的にはすべての陸軍学校の人間に武道教育を行うようになりました。彼が教えた将校の中には国家転覆を計画していた桜会の人間も含まれていました。植芝は定期的に満州を訪れ、新しく設置された満州国帝国大学でも教鞭をとっていました。1942年、大日本帝国政府が植芝の武道を合気道と名付けましたが、植芝はすべての教職を突然辞してしまいました。彼は息子の吉祥丸に東京の道場を任せ、以前に購入していた茨城県に居を移しました。そこで彼は農業をしながら、連合軍による統治の及ばない場所で1955年まで暮らしたのでした。

1942年、植芝吉祥丸は早稲田大学の学生であり、彼はB29による空襲の中東京の道場を守るために手を尽くしました。日本が降伏した後、吉祥丸は天皇陛下の玉具放送を聞き、皇居に向かうと、動揺した人々がひざまずき、うなだれているのを目にしました。そのとき、吉祥丸は合気道という、日本文化をよさを体現している武道を、海外に、特にアメリカやイングランド、その他の太平洋戦争の戦勝国に広め伝えるという夢を抱いたのでした。私は植芝吉祥丸とは1975年にお会いしたことがあります。そのときは今述べたような歴史的な知識は全く持っていませんでした。私は合気道を単に自己防衛のための効果的な武道としてしか認識していませんでした。私は合気道を世界平和に役立てようなどとは全く考えていませんでしたが、そのときにはすでに私はできれば日本に行ってみたくて決めていました。1980年に私が広島にやってきたとき、私は地方の道場に加わってそれ以来ずっと稽古を続けてきました。しかしながら、日本人ではない人間に合気道を教えるとなるときさまざまな難しさがあります。これらの難しさについて、比較文化のもう1つの側面として、また日本の「国際化」という概念との関係でいくつか取り上げてみたいと思います。

日本武道には以下の2種類があります。1つは古流武道と呼ばれるもので、かつての合戦場での

戦いを想定したものです。もう1つは現代武道と呼ばれる柔道や剣道、空手などです。どちらの武道を学ぶとしてもその目的には大差はありませんが、稽古の方法が異なります。古流武道は海外の武道家たちに対して、言語や稽古方法について一切譲歩しません。つまり、外国人たちは武道を日本の方法そのままの形で学ばなければならないのです。そうでなければ、稽古を積むことが許されないのです。ですが柔道や剣道の場合は全く異なります。それではまず柔道の例を取り上げてみから、その後合気道と比べてみたいと思います。

柔道は柔術の達人であった加納治五郎によって生み出されました。加納は教育者であり、柔術を教育のツールとして学校で教えることができる形に変化させました。そのとき、彼は「術」という技術の総体を示す接尾辞を「道」という人生の道筋を表す言葉に代え、柔道では白の柔道着と色つきの帯を着用することを決めました。加納はオリンピックを復活させ、国際オリンピック教会を設立したフランス人貴族 Baron Pierre de Coubertin の友人でもありました。加納は誠心誠意 de Coubertin に協力しましたが、結果は彼が予想していたものとは異なるものとなってしまったのでした。そして彼は、柔道はそのエッセンスを失ってしまったと感じるようになりました。

柔道は重量ごとに各級が定められた競争的な競技としてオリンピックスポーツになりました。それに加えて、結局は徹底的な稽古を積んだ外国人が日本人を打ち負かすようになり、柔道というスポーツを支える中心組織は日本から、柔道がもっと強くなった他の国々に移されてしまいました。事実、私がロンドンで合気道の稽古を行っていた2つの道場も実はイギリスの柔道のオリンピック強化選手を養成するための柔道クラブでした。ここでは白い柔道着は競争的な環境に適した色とりどりの柔道着に取って代われ、身体の動きは得点に矮小化され、日本文化という背景を失ってしまっています。言い換えるなら、柔道は生み出された場所の文化と完全に決別し、真に「国際化」したとも表現できると思います。

サッカーもまた完全に「国際化」されていると思います。国によってそのプレースタイルははっきりと異なっていて、スポーツとしての面白さをむしろ高めているようにも思います。サッカーは

イギリスで生まれたスポーツであり、因みに私は特にファンではありませんが、マンチェスター・ユナイテッドはいまでも優れたチームです。しかし、イギリスはすでにサッカーという競技に何の所有権を主張することはありません。そもそもその必要が無いからです。

私は加納が感じた戸惑いはよく分かりますが、その戸惑いには2つの異なる解釈を加えることができますと思います。加納は自分の生み出した武道である柔道が日本を飛び出して海外に広まり、数多くのトーナメントが開催されることをうれしく思ったはずですが。イングランド人はクリケットとサッカーに親しんでいます。何らかの武道やスポーツを生み出した国が必ずしもその武道やスポーツにおいて必ずしも独占的に高い質を保つことができるとは限りません。そのため、トレーニングの質・量次第では、柔道において日本人が外国人に負けることは当然予想できることなのです。同じことが相撲についても言えます。現在の両横綱は伝統競技であるレスリングで有名なモンゴル出身の人たちです。数年前に小錦関が横綱に昇進する話が持ち上がった際には、彼が横綱昇進に求められる特別な資格、品格を備えているかどうかについて議論が延々と繰り返されました。彼はあまりにも遠慮なくものを言うためにこの品格にかけるということで、横綱昇進が見送られました。最近でも朝青龍関について同じような議論がされています。このような状況に鑑みるならば、外国メディアが、品格というのは横綱として必要な資質というよりも、日本人以外が相撲の最高位である横綱になれないようにする仕組みであると報じるのも分からないでもありません。

合気道の活動組織はスポーツとしての柔道の進歩を目の当たりにし、植芝盛平の遺志を継いだ後継者たちは合気道は柔道と同じ道を進むことはしないことに決定しました。それゆえ、合気道は第二次世界大戦後、古の起源を持つ現代武道として紹介されますが、競争的な要素を含む競技ではありません。柔道のように合気道にも段位のシステムがあり、これは黒帯やはかまなどによって示されます。しかし、この段位は競走に競い勝つことではなく、技の滑らかさに対して与えられます。それにもかかわらず、植芝吉祥丸は合気道を海外に広めるために努力をし、その中でさまざまな文

化衝突を経験したのでした。一方では植芝吉祥丸はホフステードと同様、「国ごとの」文化の存在を信じ、合気道の稽古ではその国々の文化に合った形式が取られるべきであると考えていました。しかしながら他方では、植芝吉祥丸は合気道は日本武道であって、その中核をなしているのは日本文化であると強調していたのです。そのため、日本人で無い人間が彼らの文化にあった形で稽古を積むというその裁量の幅は限られ他者でしかありませんでした。この植芝の考え方は理解はできるのですが、どうしてもここで「国際化」をどのように理解するかという問題にぶつかることになります。

加納治五郎と植芝吉祥丸は2人とも彼らそれぞれの武道の「国際化」を目指しましたがそこには条件がついていました。彼らはそれによって日本武道を海外に広め、可能であれば日本人の先生が日本流のやり方の稽古を提供することを目指しました。この考え方には1つある思い込みがあります。この思い込みはたいてい隠されているのですが、時として明示的に目に付くことがあります。それは、外国人はその武道発祥の地の人間ほどには上達し得ないというものです。柔道の場合、外国人が完全に武道の性質を根本から変えてしまいましたが、合気道ではそうはなりません。しかしながら、徐々に高い段位を獲得し、日本人と同じくらいに合気道を理解しているような外国人合気道家が現れてきています。

私は日本に住んでいますので、合気道のこの側面は私に大きな影響を与えました。しかしながら、私は道場で単に稽古を積むという以上のことをしてきました。私は東広島市でドイツ人の同僚2人と一緒に道場を運営しています。つまり、私の道場では3人の外国人が日本で、日本人に、日本語で、日本武道を教えているのです。しかしながら、この状況を受け入れがたい人たちも時々いるようで、年配の日本人の方が道場を訪れ、ちらと様子を見て、すぐに出て行ってしまふのを見ることがあります。

さて、ここで私がこの講義の冒頭で挙げた問いに帰ってきました。文化を理解する、特に日本文化を理解するというのはどういうことなのでしょうか。合気道は私にとっては、生み出された国の文化のミニチュア、あるいは小宇宙のように

思えます。この、「文化を理解する」ということこそ、私がここ日本にやって来て、暮らしている最大の理由なのです。

9. 再び文化について：「比較文化」の持つ困難さ

今日の講義のイントロダクションの部分でお話したように、私は日本文化を従来の方法で、つまり私が直接的に経験した数々の日本文化の側面を紹介しながら分析してきました。実は、私の道場で合気道の稽古をしている人たちと、話ついでに比較文化の授業を受講している学生たちとの間には共通する部分があります。どちらの場合にしても彼らはある外国人と関わることになるのです。つまり、道場では日本文化に深く根を張った武道に傾倒した外国人と関わることになり、そして授業では学生たちに自分たちの文化についての問いを探究させる外国人と関わることになります。しかしながら、ここでいくつかの問いがさらに生じてきます。

- ・その分析はオーセンティック、つまり実際的であるのか。はい
- ・その分析は客観的であるのか。いいえ。
- ・その分析は重要なのか。はい、しかし何についての分析かによります。

1つの有効な作業的な仮説として、比較文化が科学的な取り組みになるためには、方法が客観的でなくてはならないということが考えられます。このことはつまり、データの分析に客観性を保ち、比較はあらゆるデータについて同様の方法で行われる必要があります。マネジメント専攻の学生たちはこの方法論の重要性を教え込まれた上で、さまざまな比較文化研究が抱える代表的な問題点、データの量が極端に少ない、調査の中で扱われている問いそのものが不適切である、結果の分析が十分ではない、などの問題点を認識することになります。

今日の講義の中では何度もホフステードの名前を出しましたが、彼の比較文化の研究方法は1つの型、モデルとして受け入れられています。そのためここでは彼の研究方法について批判的に検討を加えてみたいと思います。ホフステードの著書 *Culture's Consequences* はIBMの社員を対象とした調査の結果が載せられていて、*Cultures and*

*Organizations: Software of the Mind*にまとめられています。すでにこのタイトルが暗示するように、ホフステードは文化を精神的なプログラミングであると見なしています。「文化は社会ゲームに関する数々の暗示的なルールで構成されている。文化とは何らかの集団のメンバーとそれ以外の人間とを区別するための集会的な心のプログラムである。」ホフステードはクロード・レヴィ・ストロースとピエール・ブルデューらによって作られた概念的なツールを利用し、文化を何層もの層を持つたまねぎのようなものとして捉えています。最初の層は最も表面的なもので、日常言語や隠語、服装、髪型、旗、ステータスシンボルなどの象徴を含みます。第二層はヒーロー、英雄についてであり、その文化の中で高く評価される特性を備えており、講堂のお手本として機能する人物を含みます。なお、この人物は生きていても、すでになくなっても、実在の人物でも想像上の人物でもかまいません。そして第三層に含まれるのは儀式であり、これは社会的に必要不可欠でありつつも、実質的には不必要な集会的活動を含みます。これらの3つの層は慣習と呼ばれます。慣習はその文化の外側の人間の目にも見えるものですが、その文化の内側の人間にとってのみ文化的な意味を持ちます。そしてたまねぎの中心にあるのが価値観となります。これはホフステードの言うところの「感情の矢」であり、ある状態を他の状態よりも好む漠然とした傾向のことを指します。価値観というものは子供の頃に獲得されるもので以下のようなものを含みます。

- 善悪
- 清潔と不潔
- 安全と危険
- 何が許可されと何が禁止されるか
- 上品と下品
- 道徳的と反道徳的
- 美醜
- 自然と不自然
- 正常と異常
- 論理と矛盾
- 合理と不合理

ここまで、ホフステードによる文化についての説明は私の今日の講義でのアプローチと全く齟齬をきたしていません。ようするに、私は単に自分

の体験に基づきながら、たまねぎのいくつかの層についての実例を取り上げることで、日本文化の価値観の中核を探ってきたのです。

もちろん、この価値観というのは最も重要な側面であり、比較文化においては文化をまたがって複数の価値観を分析しなければなりません。ここでホフステードは、先のルース・ベネディクトやマーガレット・ミードの生み出した大きな作業的前提を用います。その前提とは、すべての文化は等しく共通の問題に直面するものの、その文化ごとのパーソナリティー、人格の面からさまざまに異なる答えを生み出す、というものです。そしてホフステードはもう1つの前提として、インケルス&レヴィンソンに従い、共通の問題というのは、権威などの概念を含む社会的な不平等、個人と集団の関係、男性的・女性的という概念、不確かさ・曖昧さに対する対処の仕方などであるとしています。その後、ホフステードは *Chinese Value Survey* という質問紙調査の結果に基づき、この共通の問題に長期的視点と短期的視点への志向性を加えました。

ここで1つ問題があります。ベネディクトやミードは文化を社会（たいていは原始社会）と同一視しましたが、ホフステードの調査では現代の国家の間の文化的差異について明らかにしようと

方略	誘い出されたデータ	自然状態のデータ
言葉	セル1 インタビュー 質問紙 投射的テスト	セル2 発話の内容分析 議論 文書
行動	セル3 実験室的な実験 フィールドワーク 的な実験	セル4 直接観察 記述統計量の使用

しました。ホフステードのこの社会集団と国家の区別をはぐらかす議論には以下の2つの内容が含まれます。(1)国家についてのデータの方が単一民族社会についてのデータよりも収拾が容易であるため。(2)比較文化研究の主要な目的は国家間の協力を促進することにあるため。日本の場合はこのようなごまかし方は大きな問題にはならないのですが、すでに紹介したように、例えばアングロサ

クソン民族とスコットランド民族間の協力を考えた場合、ホフステードの研究はほとんど価値を持たないことになります。

それでは「心のソフトウェア」を生み出す価値観を捉えるためにはどのような方法があるのでしょうか。価値観というものはその文化で「望ましいと考えられていること」とともに、その文化で「現実的に望まれること」を含みます。そのため、ホフステードは人々が自分の文化について述べることをそのまま鵜呑みにするのではなく、述べられた内容は何らかの外的証拠によってその妥当性が検証されなければならないとしています。

Culture's Consequences の中でホフステードは「心のソフトウェア」を調べるための4つの方略を挙げています。これらは以下の表の4つのセルに位置づけられます。

すでに理由は述べたとおり、この中の1つのセルを用いるだけでは不十分です。ホフステードはIBMの調査ではセル1のデータを用いるとともに、セル4のデータで補完していました。私の授業ではセル1の方法（質問紙というよりも質問そのものですが）とセル2の、学生にグループになって議論をさせるという方法を組み合わせて用いてきました。このことから私に授業では言葉の側面しか扱ってこなかったことになります。

ホフステードのセル1のデータが他のセルの方法よりも妥当性が高いとしています。その理由を解釈が具体的な行動や非言語的な行動に関わるものになるためとしています。このセル1のデータを収集するための一般的な道具は質問紙であり、協力者は各項目に対して賛成、反対を問われます。質問紙の結果は統計的に分析され、他の質問紙の結果と比較されます。ここで、多くのマネジメント専攻の学生が気づいている、大きな問題があります。それはどのようにして質問紙を作り、その質問紙によって求めているデータが本当に得られているのかどうかという点です。ホフステードは自然な状態で得られる人々の言葉よりも質問紙への回答のほうをはるかに信用しています。しかしながら、彼が併存的妥当性の基準として用いている類似する他の質問紙に対する回答との相関による裏づけもあまり取れていません。それはまるで、世界中の国々で犬がある特定の種類のペットフードを食べているという状況を取り上

げて、あらゆる犬がそのペットフードを好むと解釈するようなものだと思います。(データ解釈の本末が転倒しているのです。)

ホフステードがやり込めようとしているこれまでの日本人論研究者と同様、彼は大量のデータに依拠している以外の点では、彼らは皆同じ問いに答えようとしていて、ホフステードの結論が他の研究者よりも優れているという証拠はどこにもないのです。

10. *The Conclusion, in which Nothing is Concluded*

この小見出しはサミュエル・ジョンソンの著作『ラセラス、アビシニアの王子』の第49章のタイトルです。この本は18世紀における進歩という概念への風刺を扱っています。物語の中で、主人公ラセラスは徐々にアビシニアでの生活に嫌気が差し、国を出て行ってしまいます。彼は「幸せの谷」(the Happy Valley)と呼ばれる地上の楽園に向かって旅に出ました。しかし、その楽園の人々も彼が祖国に残してきた人々よりも幸せとい

うことでもないことに気がつきました。そしてラセラスはアビシニアへと戻り、自分のいるべき場所を受け入れたのでした。(この物語の中の幸せという概念と) 同じように、ホフステードの研究の裏側に存在している21世紀における進歩という概念も注意深く扱われなくてはならないように思われます。

それでもなお、私はあくまで明るい言葉で今日の講義を締めくくりたいと思います。ホフステードは30カ国のIBMの社員を対象に調査を行いました。私は合気道という日本武道に関する国際組織の長であり、この組織には約50の国々が加盟しています。そして、これはまだ合気道が受け入れられている80の国々の一部でしかありません。そう考えると、合気道を通して、私はホフステードの研究で用いられた量の倍に当たる研究材料を手元に持っていて、文化の国際比較を行ったり、あるいは日本文化のみを分析することもできるかもしれません。それゆえ、比較文化、異文化交渉学をここ広島大学で教え、学んだ経験は退職後に活かすことができそうで、楽しみに感じております。